

# 烏帽子岳

北信頸城

谷根より

1992年4月11日（曇り時々雨）

メンバー：L酒井正裕、京葉山の会2名

梶屋敷から笹倉温泉に向け早川沿いに車を走らせ、途中から谷根集落に向かう。谷根集落からは雪の状態や道路の除雪状況で車をどこに止めればよいか迷ったが、見滝集落の手前から右の林道に入り、431.9 mの辺りまで入る。

車を止めた地点から、進行方向正面の急斜面を登っている林道を目指し、これをたどる。林道を忠実にたどるとやがて一面杉の植林地となっている。ここは、尾根末端の台地であり杉が伸びているため視界は効かないが、ここから林道を離れ滝の懸かる沢を左手に見ながら南東に進みこの植林地を抜ける。ここからは、左手の斜面に取り付き尾根にでる。尾根は痩せ気味となり小さなアップダウンを繰り返しながら続いている。この尾根を忠実にたどること僅かで829 mの標高点を持つ広々とした杉の植林地に着く。この辺りは杉の背丈が低いこともあり、雪原となっている。ここは、前回の山行時に視界不良で平衡感覚さえも怪しくなり、ルートファインディングに窮したところであるが、晴れているので気持ちが良い。一度、途中まで登っていると、ペースの配分にも余裕がでる。

917.4 mのピークに登るには、この雪原を登った後にブッシュの少ない支尾根に取り付くものと、一旦標高差にして40 m程下り北西に延びる支尾根に取り付くものが考えられるが、後者のルートを採用。917.4 mのピークから

は、広く迷いやすい尾根を登る。正面には1270 mの真っ白なピークが望め、下山時のスキー滑降では核心部となるのが容易に想像できる。前回はこの辺りで引き返したが、その時はこのピークを望むのもかなわなかった。この斜面は、平野部から見ると大滝沢源頭の大斜面の隣に接する大きな斜面である。当然、1270 mのピークまではこのルートで最も登り甲斐のあるところである。雪崩の危険性も低いので尾根通しに登らず最短距離で斜面を直登する。1270 mのピークからは少し下り、北烏帽子岳（タカンビン尾根の1350 mピーク）に登る。ここは広い雪の斜面である。眼下には大滝沢の広大な斜面が広がっている。この斜面は山麓からもはっきり望める振り子状の大きな斜面であるが、標高1000 m辺りに大滝があり、山麓から想像するほどスキーに向かない斜面かも知れない。

北烏帽子岳からはスキーを置き、ザイルを持って烏帽子岳山頂に向かう。先程まで頂上が見えていたが、今はガスの中である。晴れてくれればと願ったが結局駄目であった。

頂上へは稜線を右から回り込みつつ登れば、それ程苦勞なくザイルも使用せずに安全に登ることができた。頂上は大変狭く、南北に細長いのであるが、吉尾平側は岩壁となって切れ落ち、覗き込むのもおっかなびっくりだった。

帰りの1270 mからのスキー滑降は、稜線を外して左手にこの稜線を見ながら標高800 m辺りまで一旦滑り、917.4 mのピークを登り返した方が面白いと思われたが、登り返しが面倒になったのでほぼ往路を戻った。

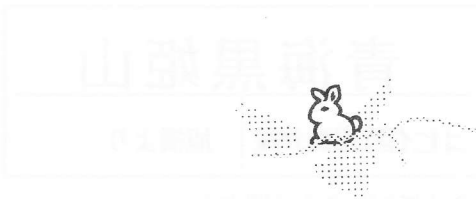
振り返れば、滑降距離も長く変化に富んだスキーができただけでなく、自分の考えたルートで長年憧れた烏帽子岳の頂上に立てたので、大変充実した

山行だった。

タイム：

見滝集落先(標高420m)(8:10)-台地末端(8:50)-標高1270 m(12:30)-烏帽子岳(14:00)-標高1270m(14:40)-見滝集落先(標高420m)(17:50)

(酒井 正裕 記)



ルート図 烏帽子岳

